
気ままに！ ウェイストランド放浪記

気分屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気ままに！ ウェイストランド放浪記

【Nコード】

N5896T

【作者名】

気分屋

【あらすじ】

気がつけばゲームの世界にいた！

そんな非日常的な事態に直面してしまった梶間 勇。

果たして勇は、法も秩序もないこの『ウェイストランド』で生き抜くことができるのか。

フォールアウト3の二次創作です。

初投稿作品ですので宜しく願います。

第1話 ことの始まり（前書き）

初投稿です。宜しく願います。

第1話 ことの始まり

2011年2月、とある県とある市とある住宅の一室にて1人の青年がテレビゲームかしまゆうをしている。

これがオレこと梶間勇である。

え？それだけかって？

髪は短めで黒、中肉中背16歳のただのゲーム好きだ。

「おし、ユニーク武器ゲット」。

今やってるのは『フォールアウト3』というゲームで、核戦争後の荒廃したアメリカを旅するという超自由型RPGである。

「むう、さすがに徹夜でやってるとキツイな」。

時刻は午前4時になるところ。窓から見える空はまさしく早朝といえる薄暗さだった。

広大なマップを歩いては発見した建物等を探索するため、ついついぶつ通しでやってしまうんだ。

こまめにセーブして後でやればいいじゃんと思ってるかもしれないが、一旦足を踏み入れると隅々まで見なくなるじゃん？　ならない？　あ、そう…。

「はあ、ここロクなもん残ってないなあ。」

今いる場所はどこかのオフィスビルか何かだったようだ。
あちこちにクリップボードや本（焼け焦げてたりして価値は殆どない）が散乱している。

「使えるのといえばスティムパックやRAD系くらいか。しけてんな〜。」

愚痴りながらもプレイしていると、ふと外からサイレンが鳴っているのに気がついた。

「また救急車か、最近多いよなあ。」

最近奇妙な事件が多発している。ゲームをしていると突然意識を失い昏睡状態に陥るというものだ。
原因がまだ解明されていないので、ゲーム禁止令みたいなのは出されていない。

まあオレは出されても自重せんがなww

「ん？ あれ？」

画面が動かなくなった。このゲームはデータ量が膨大だからときたまフリーズすることがある。

「うわぁ、またやり直しかよ…。」

OTLゾーンとしてると画面にふと違和感を覚えた。

「……ん？」

画面は荒廃した荒野でフリーズしている。見馴れた背景の筈なのに何故か目が離せない。見ていると吸い込まれそうな感覚に陥った。

その時既にオレの意識はそこにはなかった。

第2話 非日常は唐突に

ここは、何処だ…。

何故、ここにいる…。

こんな知らない場所に1人で。

——いや、オレはここを知っている。

そう、知っている。

………

ついさっきまで見ていたのだから。

「…な…んで…。」

余りの事態に動揺して言葉がうまく出ない。

目の前に広がる光景、淀んだ空、乾燥した空気、かつては形を成していたであろう建造物や舗装道路の残骸、そして荒廃した大地…。

先程までプレイしていた『フォールアウト3』の世界が広がっていた。

液晶画面越しなどではない、ホンモノの世界がだ。
立ち尽くしていると、生ぬるい風が肌を打った。

足下の石を手で拾い上げるとゴツゴツとした感触が手に伝わってくる。

頭では有り得ないと思いつつも五感ではこれは現実だとそう訴えてくる。

ふと自分を見てみると服装が変わっていた。

上下グレーのジャージを着ていた筈が、体はコンバットアーマーで頭はコンバットヘルメットを装備（色はデザートカラー）していた。手にはアサルトライフルを持ち、左腕には――

「これは…pip-boy?」

そう、この世界における高性能端末であるpip-boy 3000がついていた。

触れてみようとしたところで背後に気配を感じた。
振り返ると何かが突っ込んできた。

「うわぁっ!?!」

慌てて避けて突っ込んできたそれを見る。

「モ、モールラット!？」

そこにいたのは全身が爛れて赤黒く変色した大型のネズミ——通称モールラット——がいた。
モールラットはこちらを確認するとまた襲いかかってきた。
寸でのところで避け、反撃しようとするが突然の事態にパニックになっているせいか狙いが定められない。

「……あつ!？」

混乱していた為足場が悪くなっているのに気がつかなかった。
ひび割れた地面の段差に足を引っかけ転倒してしまう。
それを好機と見たのか、モールラットが口を開けながら飛び掛かってきた。

裂けた口から見える唾液まみれの牙が、獲物を噛み砕かんと迫ってくる。

ああ、オレ死ぬのか?
ゲームしてたらいきなり訳の分からない状況になって、何の抵抗も

出来ないままゲーム中では弱小の部類に入る相手に喰われるとか。情けなさ過ぎて涙が出るよ。

ターン、バシュンッ！

もう無理だと諦めかけたその時、遠くから何か音が聞こえた。次の瞬間には目の前のモールラットの頭が弾けとんでいた。

肉片を全身に浴びながら、勇は暫く動くことができなかった。もはや状況に追い付けず思考がフリーズしてしまっているのだ。モールラットだったモノを見て茫然としていると誰かが近づいてきた。

「危なかったな、大丈夫かい？」

そこにはVault-101とロゴの入ったジャンプスーツを着てハンティングライフルを構えた壮年の男性が立っていた。

第2話 非日常は唐突に（後書き）

いきなり死にかけた主人公。

……これからやってけるんでしょうか。

書いてて心配になりました…。

第3話 取り敢えずの方針（前書き）

亀更新ですみません。

第3話 取り敢えずの方針

大丈夫かい、と声を掛けられても直ぐには返答することができなかった。

しかしそれは、命の危険に晒された恐怖心からというわけではない。勿論それも少なからずあるのだが、それよりも彼の顔を見た瞬間の驚きの方が大きかったのだ。

「…あ、あなたは…。」

「ああ、すまない。私はジェームズ。ただの旅人さ。」

彼はそう自己紹介した。

しかし勇は既に彼のことを知っていた。

何故なら彼ジェームズは原作に出てくる主人公の父親なのだから。

「ところで君は？」

命の恩人——ジェームズさん——が聞いてきた。相手が名乗ったのに此方が名乗らないのはあまりに失礼だ。

カジマ ユウ、ここはアメリカが舞台だからユウ カジマと名乗った方がいいかな。

…… 某機動戦士の実験動物部隊のパイロットさんみたいな名前だな。

「はい、ユウ カジマといいます。先程は危ないところを助けて頂いて、本当にありがとうございます。」

「いや、いいさ。困ったときはお互い様だからね。」

なんて誠実な人だろう。

この狂気と死の蔓延する世界でこんなにも良識のある人物はそういないだろう。

「さて、詳しい話は後でしょう。そろそろ日が傾いてきたからね。近くに休める場所があるからそこまで移動しよう。」

言われてから気がついたが、辺りは薄暗くなってきていた。この世界には先程のモルラットのように放射能によって突然変異した動物やレイダーという非道な無法者たちの集団があちこちにいる。そのため常に周りを警戒しなければならず、安心して休める拠点のようなものが必要不可欠なのだ。特に夜間などの視界が利かない時などは非情に危険だ。

「わかりました。宜しくお願いします。」

こうして2人は歩き始めた。

第3話 取り敢えずの方針（後書き）

話が進まない…。

第4話 ひとまずの休息（前書き）

6月7日、1～3話を修正しました。

第4話　ひとまずの休息

夜の帳が降りて辺りは闇に包まれていた。

人に使われなくなつて久しい嘗てハイウェイ道路だつたものや元は何かの工場だつた廃墟も闇に覆われて一層不気味さを増している。時折建物の隙間を抜けていく風の音がそれに拍車をかけていた。

全てを覆つてしまうようなその暗闇の中に灯りが1つあつた。その灯りを目指して歩いている人影が2つ。まあ俺とジェームスさんなんだけど。

近づいてみると灯りは松明の炎だつた。そのすぐ傍に犬が3匹と椅子に腰掛けた黒人女性がいた。

「やあ、スカベンジャー。元気だつたかい？」

「おや、ジェームスさんかい。久しぶりだねえ。」

ジェームスさんは彼女と顔馴染みらしい。警戒もなく親しげに話をしている。

「ところでそこのお兄さんは誰だい？　見ない顔だねえ。」

「ああ彼はユウ カジマ君。昼間モールラットに襲われていたところを助けたんだ。」

「初めまして、ユウ カジマです。」

取り敢えず握手をと思い手を出してみる。

スカベンジャーさんは俺を見定めるように頭から爪先までをジーツと見ていたが、「まあジエームスさんが連れてきたんだから悪い子じゃあないだろうね。」と言って握手を返してくれた。

「さて、急で悪いんだけど何日か滞在させてもらってもいいかな？」

「どうせ空き家ばかりだからね。好きに使って構わないよ。」

何の話だろうと疑問に思いながら聞いていると、スカベンジャーさんが奥の方を指差した。

暗くて気が付かなかったが、一軒家の家とも小屋ともつかない建物がそこかしこに点在していた。

スカベンジャーさんの話によるとここは昔小さな村だったそうだし、しかしいつしか住民が離れていき廃村となったここを自分の拠点にしたのだそう。

「ありがと。恩にきるよ。」

「やだね、こっちも助けてもらってるんだから困ったらお互い様さね。あんたがいろんな機材や装備を持ってきたからあたし達は大助かりだよ。」

スカベンジャー、それは彼女の名前ではない。彼女のように自分で物を集めては商売をする。ひとところに留まることもあれば各地を転々とすることもある放浪の商人。そのような人達を総じてスカベンジャーと呼称しているのである。

「そう言ってもらえると助かるよ。」

一通りの紹介が終わったところで食事になることになった。

ジェームスさんは昼間のモールラット（ちゃっかり剥ぎ取っていた）の肉を焼いている。その他に荷物からきれいな水を人数分取り出して渡してくれた。

焼きあがった肉を分担する。見た目は悪くない。油の滴るジュシーな肉料理といったところか。だがこれが昼間の変異ネズミだと思つと食欲など湧かなかつた。

「気持ちは分かるが食べておいた方がいいよ。食べれるだけまだマシな方なんだから。」

ジェームスさんの言うことも分かる。この不毛な場所で食料確保がどれだけ困難かを。

実際ここキャピタルウェイストランドで入手できる食料といえば、大半は核戦争前の保存食となっている。他にもイモなどの野菜（ほとんどは汚染されてる）やバラモン（首が2つある変異した牛）などがあるが前者に比べて圧倒的に数が少ないのだ。

そのためモールラットのようなモンスターといえるようなものでも食料たりえるのだ。

躊躇いながらも一口かじりついてみる。

噛んだところから肉汁が 溢れ出てくる。

悪くはないな。

食事が終わった後で俺はジェームスさんになぜ自分があそこにいたのか一部始終を説明した。流石にゲームの世界に入ったとは言わなかった。話がややこしくなるし、シナリオなど話してしまったらどんな影響がでるか分かったものじゃないからな。

「つまり君はこことは違う世界、パラレルワールドから来たと言っただね？」

そういうことにしておいた。どのみち到底信じられる話じゃないし、変に思われたらうなあ。

「分かった、取り敢えず信じることにするよ。」

「……へ？ 信じてくれるんですか？ 俺が言つのもなんですが。」

びっくりした。まさか信じてくれるなんて。

「仮にその話が嘘だとしても、僕を謀っても君には何のメリットもないだろう？」

確かにそうである。

「さて、本当に異世界から来たならこの世界での生き方とか分かってないだろうから、僕が教えてあげるよ。」

「いいんですか！？ ありがとうございます！」

「でも今日はもう遅いから明日にしようか。」

「分かりました。ではおやすみなさい。」

「ああ、おやすみ。」

こうしてジェームスさん指導の下、数日に渡る『ウェイストランド

の生き方講習』が始まったのであった。

第4話　ひとまずの休息（後書き）

ジェームスさんから指導を受けて主人公が大分マシになる…予定で
す。

第5話 講習の成果（前書き）

しばらくぶりです。更新遅くてすみません。

第5話 講習の成果

甲高い金属音が辺りに広がっていく。

何度も何度も、硬いもの 同士がぶつかる音が灰色の曇り空に広がっては消え広がっては消える。

「違う！ 甲殻の隙間、柔らかい部分を狙うんだ！」

「は、はい！」

甲殻の隙間——と小声で復唱しながら手に持った物を構え直す。
右手にはコンバットナイフを、左手には10mmピストルを。鈍い光を放つ両手の得物を相手に向ける。

対する相手はほぼ全身が黒銀の甲殻に覆われていて、計8つの赤く丸い目で眼前の獲物——ユウを仕留めんと目を向けてくる。
そして自慢の猛毒の尻尾を突き刺そうと振り回しながらタイミングを図っている。

今相手にしているのはラッドスコルピオンという、放射能の影響で巨大化したサソリのことである。

その中でも小振りな（それでも軽自動車ほどのサイズはある）個体の部類に入るが、だからといって侮ることなかれ。

その甲殻は大きくなるにつれて強固で頑丈な装甲となり、尻尾の毒

素は通常よりも危険な猛毒となっているため、非常に恐ろしい存在なのである。

そのため尻尾の間合いに入らないよう気をつけ、遠距離から仕留めるのがセオリーというかベストというか。

ユウも先程から距離をとりつつ10mmピストルで撃ち続けていたのだが、その悉くが強固な甲殻に弾かれてしまっていた。その度に甲高い金属音が辺りに響く。

（かてえ！！ このサイズで装甲車並みかよ！？）

あまりの硬さに内心で悪態をつきつつも、ユウの身体は動いていた。

あろうことが、ユウは自分から相手に近づいていった。すかさず尻尾が襲う。

紙一重でそれをかわしながら岩場のある地帯に相手を誘導していく。

そうこうしているうちに行き止まりに差し掛かった。

周りは断崖絶壁、前後左右逃げ場はなし。

猛毒の毒針が突き出される。

前後も左右もダメ…なら、上からなら！！

ユウは背中中の壁を蹴り跳躍した。直後、すぐ下を毒針が通過し、断崖に突き刺さる。
ラッドスコルピオンの背中に着地し、コンバットナイフを振りかざす。

甲殻に覆われていない眼の部分なら——！！

その鋭利な凶刃がラッドスコルピオンの赤い目に深々と突き刺さる。紫の体液が噴水のように溢れ、ユウの頬を毒々しい色に染め上げる。余りの痛みに堪らず振りほどこうとするが、岩に突き刺さった尻尾が抜けず身動きが取れない。

「おおおおおおおおおお——！！」

10mmピストルを眼球に押し込む。ほぼゼロ距離で放たれた10mm弾が相手の中身をミキサーしながら突き進んでいく。

一発、二発、三発——。

マガジン内の十二発を撃ち尽くしたところには、ラッドスコルピオンは弱々しく痙攣するだけになっていた。

「いやあ、大分上達したね。凄いよ。」

「ジェームスさんのお陰です、でも僕なんてまだまだですよ。」

（謙遜してるけどかなりの成長っぷりだよ。）

ジェームスはこれまでのことを思い出しながらそう思った。

初めのうちは銃器や近接武器の扱い方、医療、コンピューターの操作など色々と教えたがどこかぎこちなかった。そのうえ失敗ばかりしていた。

サイコやRAD-Xの分量を間違えて中毒になったり、コンピューターをハッキングしたが失敗して自動ターレットに撃たれまくりたり。

戦闘でもへっぴり腰で、ラッドローチ（突然変異したゴキブリ）と戦ったときは半泣きしてて…大丈夫かこの子…とか不安に思ったものだ。

あの頃に比べればかなり変わった。先程のようにラッドスコルピオンを一人で、それも限られた装備だけで倒せるくらいになった。

初めは失敗ばかりしていたが、驚くことにどの作業も2回目を実践してみると完璧にこなせたのである。

2回目だからできたとかコツを掴んだからなんて次元の話ではない。まるで長年培ってきた技術であるかのように簡単にやり遂げてしまふのだ。

「しかし君はすごいな。初めはどの作業も上手くできなかったのに、二回目になると僕より上手にできてしまふんだから。」

「ハハ、ありがとうございます。」

彼は照れ臭そうに苦笑したあと、神妙な顔つきになる。

「……自分にもよく分からないんです。教えてもらったときは上手くできなかったんですが、二回目は自分でも驚くほど簡単にできちゃうんです。まるで、記憶はないのに身体はその動作を覚えてるようないな……。」

そこまで話すとユウ君はハッとして「すみません、訳の分からないこと言って……。」と謝ってきた。

「いや、いいさ。まあ何はともあれ必要な知識や動作を二度やっただけで身に付けられたんだ、いいことじゃないか。」

「はいっ！　そうですよね。」

ユウ君は笑顔でそう答えてきた。ここまで素直に喜んでくれると教えた甲斐があったと嬉しくなってくる。

そう思いながらジェームスはもう一方で別の思案をしていた。

——彼は一体何者なのだろうか——

これまでのこともそうだが、彼の *pip-boy* を見せてもらったときその疑問はジェームスの中で一層大きくなった。

一見自分達が使っていたものと一緒なのだが、かなり頑丈で軽量化もされている。その上データ許容量も既製品と比べて大容量。

vault で使用されているものより更に高性能なそれは、製造元も製造年月日も何も記載されていなかった。

ならばと内部のデータベースにアクセスしようと　試みたが、優れた科学者であるジェームスをもってしても破れない嚴重なプロテクトがかかっていた（データ量などのパラメーターは見ることもできなかった）。

異世界からきた、と言っていたが、ではこれは何なのだろう？

一度その疑問を投げ掛けたときがあつたが、分からないという答えしか帰ってこなかった。

——まあ考えても仕方ない、か——

ジェームスはひとまず保留にしておくことにした。いずれ分かるかもしれないし、興味深くはあるが今直ぐ聞き出すこともない。

「よし、一旦戻ろうか。……ん？」

スカベンジャーの廃村に戻ろうとしていると誰かが倒れているのを見つけた。

「だ、大丈夫!？」

ユウが慌てて駆け寄る。
駆け寄ってみると倒れているのは幼い少女だと分かった。見たところかなり衰弱している。

「これは良くないね…、早く廃村に運んで治療しないと。」

ジェームスさんが言うにはあまり思わしくないらしい。心なしか

焦りの表情が窺える。

僕たちは少女をスカベンジャーさんの所へ運ぶことにした。

第5話 講習の成果（後書き）

倒れていた少女は一体何者なのか…？
次回をお待ちください。

第6話 少女の涙（前書き）

皆様お久しぶりです。亀更新ですみません。
……こればかりだな。

第6話 少女の涙

霧がかかっていた。

辺りは深い霧に覆われて視界が悪く、10m先の物すら視認できない。

霧のせいで分かりにくい、周囲には大小様々な山の影が浮かんでいる。それらは機械の部品であったり作業用ロボットの残骸であったり、いわゆる“スクラップ”が積み重ねられたものだった。

「ハッ…ハッ…ハッ…ハッ…。」

その山々の間を二つの人影が走っていた。一人は傭兵服を着て頭には白いヘッドランプを、右目に眼帯を着けた男性、もう一人はショートな髪型の10歳にも満たないであろう可愛い少女だ。

男性は少女の手をとり走っては時折後ろを振り返っていた。まるで何かから逃げるように。

実際彼らは追われていた。

「隠れてもムダだあ！」

「おれに見つかりゃババいぞお！」

遠くから追っ手の声が聞こえた。段々と近づいてきているようだ。

——このままだと追いつかれる。

男性はせめてこの子だけでも逃がしないと、考えた。

右手でホルスターからスコープ付き44・マグナムを抜く。

「……マギー、おれが連中を引き付けるから、その間にお前は逃げるんだ。」

「いやっ！　一緒じゃなきゃいやよ！」

「そこにいたかあ！！！」

とうとう見つかってしまったらしい。男性は覚悟を決めて銃を構えた。

「いいから行くんだ！！！」

そう言い残し、男性は追っ手がいる方へ駆け出した。

「おら、来いよ！」

「さあ、戦うぞ！」

獲物を見つけて戦意が高揚しているのか、追っ手は嬉しそうに叫んでいる。

「いやよー、やー、やー……！」

「……う……ん……。」

「おや、気がついたかい？」

「……あなたは誰？」

「私はジェームス。しがない旅人さ。」

その人はジェームスと名乗った。第一印象は『いい人』だけど、見た目くらいウェイストランドで信用ならないものはない。周りを見回してみるとここはどこかの小屋のようだ。中は狭く自分が寝ていたベッドの他は椅子とロッカーしかない。

知らない場所、知らない相手。不安を募らせているとドアが開いて一人の少年が入ってきた。勿論見覚えはない。

「ジェームスさん、見回りしてきましたし——ああ、よかった目が覚めたんだね。」

その人はこちらに気がつく心配そうな顔つきで声を掛けてきた。

「悪い夢でも見てたの？ 随分と魔まされてたみたいだけど。」

「……悪い…夢…。」

言われてから考える。そう、夢を見ていた。とても大事なことの筈なのに、ちゃんと思いつけない。そもそもなんで自分はここにいるんだろう。

ビリーはどこに…ビリー！？

目覚めたばかりでぼんやりとしていた思考が一気に覚醒していく。

「ビリーは、ビリーはどこ!？」

「え、ビリー？」

少年は首を傾げている。ジェームスさんも同様のようで分からないという顔をしていた。

「君は道端で倒れていたんだけど、他には誰もいなかったよ。」

ジェームスさんの言葉に少女は愕然とした。ここにいないのなら、ビリーは…。

「何があったのか、話してくれるかい？」

「…はい。」

この人達に頼むしかない。そう考えて、逃げてきた少女マギーは何があつたかを語り始めた。

「つまり、君はメガトンから来たんだね。」

「…はい。」

彼女の話だと、メガトンは今レイダーの一団に占拠されているらしい。

周囲を堅固な防壁で覆われているメガトンが、そんじょそこらのレイダーに落とされるとは考えにくいが。

「……裏切り者がいたの。」

何を血迷ったか、中から入口を開けてレイダーを招き入れた人間がいるらしい。

「あいつはみんなにお酒や食べ物をご馳走したの。睡眠薬入りの物をね。私とビリーは自分の家で本を読んでいたから食べには行かなかったの。」

どうやら裏切り者はメガトンの住人に薬を盛って然したる抵抗も受けずに無血開城させたいらしい。

なるほど、内側から崩されたのなら納得がいく。

どれほど堅固な防壁もそれでは意味を為さないのだから。

「異変に気づいたビリーは私を連れて秘密の入口から外に出たの。そのとき見つかったちゃって、私を逃がすためにビリーは一人で戦って……。」

そこまで説明すると、マギーは急に黙ってしまった。苦しい表情で口を接ぐんでいたが、決心したのか口を開く。

「勝手なお願いなのは分かってる。でも……。」

再び沈黙が訪れる。

「……でも、あそこにいるのは私の友達、ううん家族なの……！お願い、みんなを助けて……！」

涙を流しながら懇願するマギーを見て、ジェームスは考える。いくら内通者がいたからといって、も相手はメガトンを制圧したのだ。決して少人数ではないだろう。対してこちらはたったの二人。装備は負けてないが、このままではかなり不利だ。

「ジェームスさん。何とか助けられませんかね？」

ユウが不安げな顔で聞いてくる。ジェームスは考える。pip-boyのアーノ機能を使えば何とかなるかと。

「うん、困ってる子がいたら助けてあげないとね。」

その言葉にパツと顔を明るくするマギィ。

「うんうん、それでこそあんた達男だよ。こんな可愛い女の子が涙溜めながら必死にお願いしてるんだ。助けなきゃ男じゃないよ。」

ギィ、とドアが開きスカベンジャーさんが入ってきてそう言った。その手には幾つかの道具が抱えられている。

「餓死だよ、持っていきな。」

そう言つて渡されたのはスティムパック、血液パック、モルバイン、弾薬、食糧、そして――

「これは…ステルスボーイじゃないか!？」

ジェームスさんが驚いている。それもそのはず、ステルスボーイは携行式の光学迷彩装置でゲーム中でも中々入手できないレアなアイテムなのだ。

戦前の技術で造られたこの装置はウェイトランドにおいても現

存しているものは少なく、稀少価値の高い代物なのだがスカベンジャーはそれを

無償で提供しようというのだ。それも三つもだ。

「あんた達には世話になつてゐるからねえ。それにこんな幼い子に家族を失うような悲しい想いはさせたくないんだよ。」

そう答える彼女の瞳には、どこか哀しげな光が宿っていた。もしかしたら過去にそういった出来事があつたのかもしれない。

「さあさ、お喋りはここまでにしてさつさと準備を始めようじゃないか。早くこの子を安心させてあげないとねえ！」

そう意気込んだスカベンジャーさんの顔には既にさつきまでの哀しげな表情は無くなっていた。

こうして何故かスカベンジャーさん主導のもと『メガトン解放作戦』の

準備が進められたのであつた。

第6話 少女の涙（後書き）

倒れていた少女はマギーでした。

というわけで、次回はプレイした人なら一度は立ち寄る（多分）あの街へ！

第7話 メガトン救出作戦その1（前書き）

えー…更新遅れて申し訳ございません。第7話です。

第7話 メガトン救出作戦その1

——メガトン。

キャピタルウエイストランドのほぼ中心に位置する、四方を防壁に囲まれた街だ。

元々はそこには何もなかった。200年前の全面核戦争が始まって少し後、vaultに入れなかった一般市民が投下されたが不発だった核爆弾の側に集まっていき飛行機や車の部品、廃材などを利用して組み立てたのが始まりだった。

初めは核爆弾の回りにテントが点々と張られているだけのこじんまりとしたものだったが、徐々に人が集まり使えそうな部品を探しては壁を作り家々を建てていき、どんどん大きくなっていった。

そうして出来た外壁の周辺には、使えなかったり余った部品の山々が大小幾つもある。

その中には廃品部品や廃電子機器、修理すれば動かせるロボットなど様々な物が埋まっている。これらがメガトンを運営していくための主な資金源となっている。閑話休題。

さて、長い年月を経て組み上げられた絶壁は内側にいる住人を外敵から守り続けてきた。

その高く分厚い防壁に庇護され、昼も夜も静かな時が流れるメガトンであったのだが、今はなにやら様子が違う。

今は夜。普段なら殆どの住人は自分の家に戻っているのだが町の中心近くにある食堂は大勢の人で溢れかえり喧騒が広がっていた。

時折怒号なども飛んでいるが他の者は特に気にした風もなく自分に宛がわれた食い物や酒をがつついていた。

「あゝうめえ！　ここの連中こんないもん食ってやがったのか！」

「全くだな、オレたちなんか食い物に困ったときはその辺の人間捌いて喰らってたってのによ。」

「まあいいじゃねえか。この場所はもうオレたちのモンだ。これからはこっちが楽しむ番だろ？」

「へへっ、違えねえ。」

男たちの話を聞いて周りの連中から卑下た笑いが上がる。

話の内容から分かるように、彼らはここメガトンの本来の住人ではない。今町の中を歩いているのは非道、無法者で知られるレイダー達である。

数日前、たった一人の青年の裏切りによってこのメガトンは彼らの手に落ちたのだ。以来、レイダー達はこうして蓄えられた食糧や酒で好き放題していた。

前にいた場所よりも立派な拠点／住み処を手に入れて彼らは上機嫌だった。その為か、周辺の警戒を全くといていいほどしていなかった。

だがそれも仕方がないのかもしれない。ここメガトンの周辺には大きな脅威は存在しない。核爆弾があるためか誰も近づこうとしなからだ。モンスターにしてもモールラットやブロートフライ（突然変異したハエ）のような小型のものが殆どを占めるため、気にする必要もない。彼らはそう考えていた。

その考えが自分達を絶望のドン底に叩き落とすことになることを、今の彼らには想像すらできなかった。

新たな住人がばか騒ぎする食堂から離れた場所にある一角。あちらと違ってここには人影がなく継ぎ接ぎのような壁が静かに佇んでいた。

その一部がズズズと小さな音をたてながら動き出す。そこから二つの人影が現れた。一人はサンドブラウンのコンバットアーマーを着こんだ青年。もう一人はスカート姿の年端もいかない少女だ。

「ふう、潜入成功だね。でもこんな入口があるとはね…。」

「私もこの間見つけたの。どうやら取り付けが甘かったみたいね。」

…メガトンを建造した先人の中には手抜きをしてた人がいたようです。

まあそのお陰で助かってるけど。

そんなことを考えながらアーマーを着た青年——ユウは懐から携帯電話くらいの大きさの機器を取り出す。

ピッ

「……大佐、潜入に成功した。」

『……大佐って誰だい？まあいい、合図があるまで待機しててくれるかい？ 言っておくけどこれはスニーキングミッションだ。くれぐれも見つからないようにね。』

「了解。」

ピッ

ジェームスさん製作の簡易無線機で通信をする。 ……しかしやはり通じないか、分かってても寂しいな。

「しょうがない、合図があるまで隠れていよう。」

「大佐ってだあれ？」

「その話はいいから。」

マギーの質問を受け流しつつ、見える範囲で周囲を観察する。

街の真ん中近くの食堂には十数人のレイダーが集まり飲み食いしている。上の階層にある建物には見張りだろうか、レイダーがドアの前で一人やるせない感じで立っている。

恐らくあそこに住人を閉じ込めているのだろう。

情報を集めようと周囲を調べていると、その建物に歩いて向かう三人のレイダーが目映った。

一人は前を歩き、もう二人はそれに付き従っている。先頭の人物は他のレイダーとは別格のようだ。見張りのレイダーが慌てて背筋を正していた。

「あ…あいつは…!？」

「知っているのか、ライダー——」

オレが喋り終わる前にマギーはその建物目掛けて飛び出していった…ってオイ!？

スルーされた、じゃなくていきなり出ていったら不味いでしょうよ! 放っておくわけにもいかないので、自らも後を追う。しかし普段は大人しいマギーがあそこまで取り乱すなんて何者だろう？

とりあえずオレ達は見張りのいる建物の横まできた。ああ、移動中はスカベンジャーさんから貰ったステルスボーイを起動したので難なく近づけたよ。

マギーも起動させていたから少しは冷静さが残ってるようで安心し

た。

さつき見かけた三人は中に入ったようで、見張りだけが相変わらず面白くなさそうな顔で立っている。

クイクイツ

「ん？」

マギーが服の袖を引っ張る。

「ねえ、何か食べ物ある？ いい作戦があるんだけど。」

「…はあ、折角メガトンを手に入れて贅沢できるってのに何でオレだけ見張りなんざやらなきゃなんねえんだよ。」

彼はリーダーから見張りをするように言われ、不本意ながらもここに立っていた。内心は断りたい一心で一杯だったが、自分達のリーダーは齒向かう者は容赦なく殺すことを知っているため渋々引き受けたのだ。

本当なら今頃自分もあの食堂でばか騒ぎをしていた筈なのに、と考えて溜め息を漏らす。楽しんでいる他の連中を見て、差し入れの一

つでも持つてこいつてんだと悪態をつく。ここ最近録な食事であり
つけず、メガトンに入ってからもご馳走を目の前にしながらリーダ
ーの言い付けのせいでお預けの状態。不満一杯の彼の心情を表して
か、腹の虫が激しく泣き出す。

コトッ

「んあ？」

音のした方に目を向けると、床に食料が落ちていた。辺りを見回
すが誰もいない。

もう一度キョロキョロと辺りを見回してから、

「誰もいねんならオレが食っちゃっても問題ねえよな。」

と言って拾い物の包装を解く。中身は即席ポテトだった。

本来なら袋から取り出した後磨り潰してマッシュポテトにしてから
食べるものだが、彼は塊のままかぶりついた。空腹の彼には調理な
どという過程は要らず、ただ腹が膨れればいいという考えだからだ。

「ん？ 何か固い部分が…。」

咀嚼しているとガリツという音が口内から聞こえたが、見張りは構

わず飲み込む。食べたという満足感に浸っているとき異変は起きた。彼の表情が幸せそうなそれから徐々に苦悶のそれに代わり始めたかと思うと、自身の腹部を押さえて悶え始めた。顔面からは異常なまでの汗が流れ、顔の色も心なしに蒼白くなっている。

（は、腹がああああ！？）

突然の激痛に焦る彼の腹からは先程の腹の虫とは別種の音が鳴り響いている。

早くトイレに行かなければ！！ 身体からは危険信号とともにそんなメッセージが送られてくるが、ここを勝手に離れるわけにはいかない。最後の理性が押し留める。少しの間留まったようだったが、危険信号が理性を上回ったのかトイレの方向に駆け出していった。

「……何混ぜたんだ？」

「下剤。モイラさんから貰ったやつ。男子とかに苛められたら使いなさいってくれたの。」

……流石モイラさんだ。やることがえげつないぜ。

見張りがいなくなったので扉まで近づき扉の窓から中を窺う。室内ではレイダーの青年と縄で縛られたテンガロンハットを被った男

が話している所だった。

第7話 メガトン救出作戦その1（後書き）

お久しぶりです。気分屋です。前回の更新からかなり経ってしまいました。原因は私の文章力不足とモチベーションです。名前通りの気分屋ですみません。これからこのようなことがあるかもしれませんが、精一杯書きますので宜しくお願いします。

さて、第7話を投稿したわけですが何か酷い出来ですね。改めて自分の文章力のなさにショックを受けました。次回はもっといい感じの文章にしたいなあ…。

第8話 メガトン救出作戦その2（前書き）

更新です。今回は二話投稿します。

第8話 メガトン救出作戦その2

「やあルーカスさん。気分はいかがですか？」

「……このオレが気分最高だ、ヒッハー！！ってな感じに見えるのか？もしそうなら病院に行くのを勧めするぜ。ポツポよお……。」

ポツポと呼ばれたレイダーの青年の言葉にテンガロンハットを被った男——“自称”保安官のルーカス・シムズは憎々しげに答える。

「そんなこと言わないで下さいよ。せっかく心配で様子を見にきたのに。」

ケタケタと笑いながら話す青年とは対称的に、ルーカスの表情はどんどん憎しみで歪んでいく。ルーカスだけではない。彼の後ろで同じように縄で縛られている他の住人も同様に顔を歪めて彼を睨んでいた。

「心配だと……？ オレ達をレイダーなんか売りやがって、裏切り者がどの面さげて言いやがる！？」

そう、ルーカスの言う通り彼はレイダーを招き入れた張本人である。にも拘わらず当の本人は「裏切り者？」と言いながら分らないといった顔をしていた。かと思うと何か合点がいったのか手をポンと叩いて話す。

「ああ、僕は裏切りなんてしてませんよ。」

「キサマ、ふざ——」

「だって——」

ルーカスが叫ぼうとしたのを遮ってポツポは話す。

「僕は初めからこちらの人間なんですから。」

「……何…！？」

その言葉にルーカスをはじめ縛られた住人のあちらこちらから驚愕やどよめきが起こる。

「一年前、僕はメガトンの前で倒れていたところをあなた方に助けて頂きました。その恩に報いるため仕事を手伝い食糧を提供したり

し、皆さんと交流を深めていきました。」

室内にはポツポの声だけが響いていた。他の者はただ黙って彼の言葉に耳を傾けている。そのことに満足したのか、彼は口元に微笑を浮かべながら更に言葉を紡いでいく。

「しかしそれが畏だったのです。巨大な壁に護られた難攻不落の街、メガトンを内部から突き崩そうと画策する、このスプリングベール地区のレイダー頭目ポツポのね！」

自分の演説に寄っているのか今度は身振り手振りも加えて語り出した。

「これを覚えていますが、ルーカスさん？」

そう言っただけで懐から取り出したのは細長いラジコンのコントローラーのようなもの。ルーカスには見覚えがあった。ポツポを助けた少し後に核爆弾の問題を話したら起爆装置解除用のツールを作ると言っただけで出来上がったのがそれだった。

「それは起爆装置解除用の……」

「実はこれ解除用ではなく起爆用のツールなんですよ。」

「なんだと!？」

その言葉に驚くのは当たり前だ。自分の拠点にある核爆弾を解除するどころか起爆装置を取り付けてしまうなんて狂気の沙汰だ。

「これは一種の保険みたいなものです。」

「保険……？」

「はい、近々私はユーロジー・ジョーンズの所に商談をしに行こうと思ってまして……。」

ユーロジーの名前が出た途端住人達の顔色が変わった。ユーロジー・ジョーンズといえばキャピタルウェイストランドで最も有名な奴隷商人である。それ故容易に想像できる、彼の言う商談の商品が自分達であることを。

「その間ここを空けることになります。あなた方は血気盛んな方々ばかりですから罷り間違つて反乱でも起こされたら困りますし、折角の商品を処分するような真似もしたくないんですよ。」

「……つまり仮に俺達がここを取り返しても核で吹き飛ばせるから抵抗は無駄だと……？」

「そうです。流石ルーカスさん、話が早くて助かります。」

ルーカスに向かってにつこりと微笑んだ後、ポツポは得意気に起爆ツールの説明を始めた。それによると、装置の動作は彼の持つツールと核爆弾に取り付けたコンソールでできるらしい。ただし、コンソールのほうはパスワードが必要でそれは彼以外は知らず、また下手に弄くったり損傷を与えると起爆シーケンスが始まる仕組みになっているため、触れないほうが身のためだという。

「勿論監視用のアイボット（小型の浮遊型メカ）を配備した後で出発します。これの映し出した映像は直ぐに僕の元に届きますから抵抗しても無駄ですよ。まあこの人数のレイダーを相手に録な武器もなく勝てるとは思えませんからね。」

これまでの話を聞いて住人達の顔からは希望が無くなっていた。皆が絶望にうちひしがれているなか、押し黙っていたルーカスが口を開いた。

「……マギーとビリーはどうなった……？」

その言葉に他の者がハッと気付く。パーティーが開かれた日この二人は何とか逃げ出すことが出来たがレイダーから追っ手がかかっていたのだ。

「…ああ、ビリーはここにいますよ。マギーは見つからなかったそうですね。うですから今は…」

最後まで言わなくてもルーカスには彼の言おうとしていることが分かった。年端のいかない少女が一人で生きられるほどウェイストランドは生易しくはない。どこかで力尽きているかもしれない、モンスターに襲われたかもしれない。どのみち死んでいるだろう、彼はそう考えているのだ。

「あの二人にもパーティーには参加してほしかったんですけどね、残念です。折角感謝の気持ちを表して最後の晩餐を開いたというのに。」

二人ともいい値で売れたろうになあ、と呟きながらポツポは出入口に向かう。

「では準備に取り掛かりますので失礼します。最後にパーティーの時にも言いましたがお礼を言わせて下さい。」

住人全員を見渡してから顔には歪んだ笑みを讃えてお礼の言葉を述べる。

「ありがとうございます。僕を信じて、受け入れてくれて。お陰で

簡単にことは済みましたよ。」

彼らが出ていった後部屋には希望を失った住人達と重苦しい絶望だけが残された。

「んん？ 見張りがいませんね。しょうがないな、キミ変わりにやってください。」

「わかりやした。」

勝手にいなくなった見張りへの罰を考えながら付き添いの一人に命令するポップ。そして残りの一人を引き連れてどこかへ歩いていく。ユウとマギーはそれを物陰から眺める。目で追っていくと着いたのは核爆弾だった。

「気分はいかがですか？」

一体誰に話しているのだろう、そう思って目を凝らして見てみると侵入したときは暗くて分からなかったがそこには鎖で核爆弾に手を繋がれている一人の男性がいた。

「…っ！！ ビ…ムグッ！？」

その人物を見てマギーが叫びそうになったのをユウが慌てて口を塞ぐ。幸い新たな見張りには気づかれなかったようだ。しかし叫びそうになるのも無理はない、その人物とはマギーの最も大切な家族、ビリー・クリールだったのだから。

「……………」

「返事も返してくれないのですか、悲しいですねえ。」

話しかけられたビリーからは返答がない。だがそれも彼の姿を見れば一目瞭然だ。核爆弾の落ちた所はクレーターとなっていて長い年月で雨水が溜まり放射能汚染された水溜まりとなっている。そこに浸かる形で繋がれている彼のいつも着ている傭兵服は弾痕や切り傷でボロ雑巾のようで、破れたポケットからは弾丸が零れて水溜まりの中に沈んでいる。真っ白だったヘッドランプも血が滲んでどす黒くなっている。満身創痍な上にいつからそこにいるのかは分からないが、汚染された水に浸かっているのだ。ジワリジワリと放射能レベルが上がっているだろうそんな状態で普通に受け答えできるわけがない。

「マギーさんは残念ながら見つかりませんでしたよ。」

返事がなくとも構わず話し続けるポッポ。

「彼女なら幼くて可愛らしくていい値段で売れたでしょうに、実に惜しいことをしました。」

やれやれといった感じで首を竦めてみせる。言葉とは裏腹にその態度は軽い。彼にとっては沢山の商品のうちの一つでしかないのだから死んでしまってもそれほど苦ではないらしい。

「……それとあなたには見せしめのためこのまま死んでももらいますよ。ここまで反抗的ですと売れたときクレームをつけられるかもしれませんしね。」

そう、ビリーは捕まっただけからずっと反抗的な態度を崩さなかった。仮にこのまま売り飛ばしても出荷先で問題を起こすのは目に見えているので、それならば他の住人から希望を奪うための見せしめに利用しようとポツポは考えていた。

「自分の最期くらいは決めさせてあげましょう。このまま放射能でじわじわ死んでいきますか？ それとも——」

そう言っただけで腰のホルスターにある中国軍ピストルを抜きビリーに銃口をむける。

「僕の手にかかり楽になりますか？」

ビリーは何も答えない。ポツポの引き金にかけた指に力が少しずつ込められる。

(……ビリー……!!)

少女が心の中で悲鳴をあげる。トリガーが引き抜かれようとしたそのとき、爆発音とともにメガトン全体を巨大な振動が揺らした。

第8話 メガトン救出作戦その2（後書き）

流石に無理矢理な流れですね…。ビリーの運命や如何に!？

第9話 メガトン救出作戦その3（前書き）

どうなるメガトン！？
メガトン編その3です。

第9話 メガトン救出作戦その3

突然の激しい揺れに宴を楽しんでいたレイダー達は浮き足立っていた。何が起きたのか、揺れの原因は何かを確かめるため皆あちこちらへと走り回っていた。読みかけの本を投げ捨て宛がわれた家から外に飛び出した彼女、スプリングベール地区では副リーダーにあたるキヤスもその一人だった。

「何が起きたの!？」

「わかりやせん…。しかしあの爆発音とほぼ同時に起きたデカイ揺れ……。けっこう近いですぜ。」

「姉御、あれを!」

近くにいた部下と話していると別のレイダーが何かを指差して叫んだ。

指された方を見ると壁の向こうに巨大な黒煙が立ち上っていた。煙とともに赤い火の粉が舞っているのを見るあたり、どうやらスクラップ置場のあたりで爆発があったようだ。

「何をポケットと突っ立っているんです!？ 早く火を消しに行きな

さい!!」

声のした方を見ると我等がリーダーのポツポが回りの連中に怒鳴り散らしている。彼の近くには捕まってから反抗的だった眼帯の男がいる。虫の息だがまだ生きているようだ。

「あそこにある部品だけでもかなりの利益になるんですよ!? 全員で被害の拡大を防ぐんです!!」

「待ちなよポツポ。幾ら何でも全員は不味いよ。念のため何人かは警護に残して——」

「ここら一帯には大した脅威はありません! ともかく火を消すんです!」

「……了解。」

とりつく島もないポツポの態度に何かを言いかけようとしたがやめ部下を集めて現場に向かう。念のため二十人のうち四人を残しておく。

このときポツポが冷静に指揮をしていれば、そしてキャスのいう通り警護に人員を割いていれば違う展開になっていたかもしれない。自分達が破滅の道を辿っていることを彼らはまだ知らない。

（あ、危なかった…！）

あの爆発（合図）がもう少し遅ければビリーは殺されていた。ナイスタイミングだジェームスさん。マギーと一緒に胸を撫で下ろすと、こんなことしてる場合じゃないな。

「マギー、作戦開始だ。街の皆を助け出してくれ。」

「でもビリーが…」

「あいつのことは任せてくれ。必ず助ける。」

少しの間黙っていたが「……分かった。」と言って駆け出していく。素直に納得してくれて助かった。どう説得しようか悩んでたんだ。さて、助けに行きますかね。

今気がついたけど先程までいたポツポの姿が見えない。どこにいったかと探してみるとメガトンの上層、位置的には出入口の門より上にある見張り台によじ登り、手にした双眼鏡で外の様子を見ていた。他にも火の手が上がってないかと慌てふためいて外に気を配っている。そのお陰で中までは気が回らないようで、ゆっくり救出作業ができる。これぞまさしく灯台もと暗しだな。

そんなことを考えながらビリーを繋いでいる鎖を外そうと彼に近寄る。

自身に近づくものを感じたのかビリーは身動きした。

「ご安心下さい。あなたを助けにきた者です。」

返事はないが聞こえているようで、少しだけ警戒を解いてくれた。オレはポケットからヘアピンを取り出し、腕輪の鍵穴にピッキングで解除を試みた。

「……………なぜ…?」

ビリーが呟いた言葉の意図が分からず少し固まってしまったが何故助けるのかと聞いているのを理解したのでこう答えた。

「マギーに頼まれたんですよ。大切な家族を助けてって。泣きながらね。」

「……………マ…ギ…ィ……………が……………?」

マギーの名前を聞いたとき、虚ろだった目に少しだけ光が戻ったのをオレは見た。

門から出たあとキヤス達は爆発の起きた場所へ駆けつけていた。火の手は思ったより拡がっていて消火するには少し時間がかかりそう
だ。

「お前達は消火器で火を消せ！ 他の者は消火ホースのノズルを――」

ビシュンッ

キヤスが指示をしている最中、何か音がした。振り返ると初めに指示を下した部下の一人がいない。もう一人も何が起きたのかわからずただ呆然と立っていた。よく見てみると消えた部下がいた所には灰の山ができていた。それを見てキヤスは漸く何が起こったのかを理解した。

「敵襲だー！！ 隠れろー！！」

部下に呼び掛けた途端燃え盛る炎の向こうから赤い光が伸びてきた。それはレーザーの光だった。 先程消えた部下はレーザー光線に直

撃して灰にされたのだ。

キヤスはアサルトライフルを構えてスクラップの陰から様子を窺う。炎の壁の向こうには何体かのプロテクトロンの他にもカメラアイの光源が確認できた。正確な数は分からないが、かなりの数のようだ。この辺りにはそのような大規模な敵勢力はいない筈なのだが、ならば目の前にいるあれらはいったい何者なのだろう。

思案している間もレーザーが放たれる。自身が隠れているスクラップの山にも数発当たり、その内の一発が鼻先を掠めたときキヤスは詮索をやめて部下に指示を出していた。

「相手の数は多いが怯むな！ 連中射撃の精度がかなり悪いぞ。当たらなければどうということはない！」

彼女のいう通りレーザーの精度は悪く、殆どは見当違いの方向を撃っていた。そのことに気づいた部下が反撃を始める。

——長い夜になりそうだな——

そう考えながらキヤスもライフルの狙いを定め引き金を引いた。

何やら外が騒がしいな。さっきの爆発と何か関係があるんだろうか。見張りに立っていた者も何処かへ行ってしまったようだし、行

動を起こすなら今だ…がどうする？

ルーカスは何とか逃げられないものかと考えを巡らせるが、中々いい案が浮かばない。頭を悩ませているとガチャリとドアノブが回った。見張りが戻ってきたのだろうか？

そう思い身構えていたが

開いたドアの先には誰もおらず、夜の暗闇と向こう側にある家屋の明かりが見えるだけだった。不審に思っているとドアがひとりで閉まった。住人達には何が何だか分からなかったが、次に聞こえた声にその疑問は掻き消されていた。

「皆、大丈夫!？」

「その声…マギーなのか!? どこにいるんだ!？」

問いかけたあと、彼らの目の前にマギーが姿を現した。

「助けにきたよ!」

「馬鹿、何で戻ってきたんだ!？ お前一人じゃ無茶だ!！」

確かに一人なら不可能だろう。むしろ捕まってしまうのは目に見える。だが――

「大丈夫、一人じゃないよ。他にも頼りになる仲間がいるから。」

今の彼女は一人じゃない。危険を省みず助けてくれる人がいる。だから大丈夫、と彼女の目が語っていた。

マギーに拘束を解いてもらった住人達はこれからどうするかを話し合う。マギーからメガトン内部の戦力が手薄になっていると聞き、その結果、武器庫を奪い返して奴等を撃退しようということで話が纏まった。

——少しずつだが、希望が見えてきたな——

ルーカスはそう思い、口許に笑みを浮かべて武器庫へと向かった。

第9話 メガトン救出作戦その3（後書き）

内容が安直すぎたかなあ。気分屋のキャパシティではこんなのしか書けません…。

第10話 メガトン救出作戦その4（前書き）

更新です。

第10話 メガトン救出作戦その4

どうしてこうなった…。

「…お、おい…何だよあの数……。」

「……オレに聞くなよ……この辺にあんな数の敵がいるなんて聞いてねえんだからよ……。」

後ろで部下二人がそんなやり取りをしているが、それに答えてやることは僕にはできない。これだけ大規模な集団がこの近くにいたなんてここメガトンに一年いた僕でさえ聞いたことがないのだから。

眼窩では暗闇の中伸びる赤いレーザー光と発砲音とともに生まれるマズルフラッシュが各所で光っては消え光っては消える。キヤスは善戦しているようで戦闘開始から数十分経った今も敵は前衛が戦闘状態に入っているが後方の集団には動きがない。

「…ど、どうでしょう、リーダー？」

先程話していた部下の一人がそう問いかけてくるが、答えられるわ

けがない。リーダーの座についてから今日までこんな事態に直面したことなんてないんだぞ！？ どうすればいい？ どうすればっ！？

「リーダー！！ た、大変ですっ！！」

想定外の事態に対応できず困惑しているとメガトン内に残っていた別の部下が慌てて此方に駆けてきた。これ以上の厄介事は勘弁願いたいのだが、部下の慌て用は尋常ではなかった。

「一体何ですか！？ この大変なときに！」

「捕らえてた住人が逃げ出したんです！ 連中どうやら武器庫に向かってるようで…！」

部下の報告に思わず絶句する。

「見張りは…見張りは何をしていたんです！？」

「い、いや他にも被害がないか探せとリーダーが命じられたんで…」

「

そうだった。言われてから思い出したが自分がそう命じたのだった。

自らの失態に齒噛みしながら武器庫のある方向に目を向けると、住人達がそちらに駆けていくのが確認できた。その中にもう死んだと思っていた少女の姿を見つけたとき、ポツポは驚愕した。

どうやら厄介事が増えたようだ。その場にいた四人に脱走を阻止するよう命令すると手下達はすぐさま住人の後を追いかけていった。

「……さて、これからどうしたものか——うわっ!？」

これからの行動について思案しようとした矢先、衝撃が彼を襲った。突然の衝撃に思わず尻餅をついてしまう。慌てて辺りを見るがその場には自分以外誰もいなかった。

所変わってここはメガトンの外。謎の敵勢力とレイダーの闘いは今も続いていた。ポツポの言う通りレイダー側は確かに善戦しているが、決して無傷ではなかった。幾条もの赤い矢の雨に晒され、初めはキヤスを含め十六人ほどいたのが既に半数を数えるほどに減ってしまっていた。

「……ぐあっ!？」

銃声とともにまた一人部下が倒される。そう、レーザーではなく銃弾でだ。実は戦闘開始から今までで倒れた仲間のうち七人は銃でやられている。レーザーは前述の通り雨と形容してもいいくらい

何発も放たれていたが、やはり精度は悪く当たっていない。逆に銃の方は 恐ろしく正確で、炎上したスクラップという光源があるとはいえここまでの確な狙いをつけられるとは相手には余程凄腕の狙撃主がいるのだろう。

このままだとマズイわね ……。

現状を分析していたキヤスはこのままでは全滅することを悟った。味方は あと七人…いや、戦力的には六人か。“アレ”は使い物になりそうにないし…。そんな風に思いながらその人物の方へ目を向ける。

「…………ぐおお、腹があ…。」

そこには顔面蒼白で腹を押さえて激しく悶えている男性レイダーがいた。本人の話によると、見張りをしていたときに拾い食いして腹を下してトイレに向かう途中ポツポに捕まったそうだ。そして火を消すのを手伝ってこいと無理矢理向かわされたらしい。

——こんな状態で何ができるつのよ。

内心でポツポに悪態をつく。生まれたての小鹿みたいに足をカクカクさせているこの男が何かの役に立つとは思えない。寧ろ邪魔になるだけだろうに我らがリーダーにはそんなことすら分らないらし

い。

「…あ、姉御……姉御!!」

此方に近づいて助けを求めてくるがどうしようもないので軽くあしらう。他の連中の所にも行っているが相手にされていない。

「うっとおしいな、その辺でやっちまえよ!!」

堪り兼ねた一人が怒鳴るがこの弾幕の中を行くのは自殺行為だろう。

「……エド、エド……!!」

「祈れ!!」

「何にだよ……! ……神……紙……!」

またこっちに近づいてきたので突き飛ばしてやったが、どうやらそれで限界を越えてしまったらしい。

「…ク…クリアー……。」

やりやがった…。すかさず辺りに異臭が充満する。本人は後悔と開放感の入り交じった何とも言えない表情をしている。

「何やってるの！ 風下へ行きなさい！」

そう言った矢先、右腕を衝撃が襲った。続いてきた痛み顔をしめて、漸く自分が狙撃主に撃たれたのだと認識した。

「姉御！ 大丈夫ですか…！？」

「このままじゃ全滅だわ…。一時メガトンまで撤退！ 急げ！」

命令を聞くや否や部下達は我先に駆け出していった。レイダー側が敗走したことにより、メガトン外部での戦いは謎の勢力の勝利で幕を閉じた。

「…チッ、あいつらもう気づきやがった。」

そう言つてルーカスが見やる方向からは四人のレイダーが此方に駆けてきていた。その手には中国軍ピストルや10mmサブマシンガン、金属パイプにコンバットショットガンと思ひ思ひの武器が握られている。対するこちらは武器庫に蓄えられていた10mmピストル十数挺とコンバットナイフ数本、それとスナイパーライフルとハンティングライフルが一挺ずつだ。

人数や武器ではこちらに分があるかもしれないが、個々の戦闘能力では相手の方が上手だろう。メガトンの住人は戦闘を経験したことがあまりなく、対するレイダーは闘争と殺戮の毎日を過ごしているのだから戦闘経験の差は如何ともし難い。

「来るぞ。相手は四人、油断するなよ！」

ルーカスが皆に向かって注意を促す。皆一様に頷いて気を引き締めている中、一人だけ戦列から離れようとする者がいた。

「オレは抜けさせてもらつぜ。」

「何故だ、モリアーティ。今は戦わねばならないときだろう!？」

抜けようとしたのは酒場の店主のコリン・モリアーティだった。

「戦うときだろうが何だろうが命あつての物種でね。第一オレは酒場の店主だぞ、戦闘なんて専門外だ。」

そう言つて武器庫からでようとするしないモリアーティを見てルーカスが何かを言いかけようとする前に、マギーが口を開いた。

「モリアーティおじさん、その胸についてるのは何なの？」

マギーが指を指した所には何やら『K・M』と書かれた楕円形のワッペンが貼られていた。

「おお、これか？ これは通称コリン・モリアーティ印よ！ 戦前のブランドみたいな感じで売れば儲かるかと思つてな。これが付いてる酒はみんなウチの品つてわけよ！」

気づいてくれたのが嬉しかったのか熱が入った感じで解説するモリアーティだったが、マギーの次の発言で凍りついてしまった。

「ふーん、じゃああその食堂に並んでる空き瓶は全部おじさんの店の品つて訳ね？」

硬直から立ち直つたモリアーティは慌てて身を乗り出して食堂を見る。そこにはマギーの言つたとおり彼ご自慢の『K・M印』がデカデカと貼られた 酒の空き瓶が至るところに見受けられた。

「……やっぱり戦わしてもらうぜ。あの腐れレイダーども…人の酒に手え出しやがって…地獄見せてやらあっ…!」

ワナワナと肩を震わせて意気込むモリアーティ。それを見て苦笑するルーカスがマギーに目を向けるとこちらに向かってブイサインをしていた。彼女の人を乗せる上手さに舌を巻いたルーカスであった。

リーダーから命令を受けて武器庫に向かっていたレイダー四人は辿り着いた途端銃弾の嵐に見舞われた。慌てて建物の陰に身を隠す。ここは別れて近づこう、と年長のレイダーが指示を出し二人一組になって左右から接近を試みる。時折反撃しては銃撃の間隙を縫って徐々に距離を詰めていく。年長のレイダーはもう一人と共に左側から近づく。曲がり角を曲がったそのとき後ろから鈍い音と悲鳴が聞こえ、曲がり角を戻ってみるともう一人が倒れていた。

「どうしたんだ!? 何があった!?」

駆け寄って聞いてみるが意識が朦朧としているのかうまく答えられないようだ。

「…よ、酔っ払いが…酔っ払いが…」

漸く出たその言葉は理解に苦しむものだった。その言葉の意味を聞こうとしたとき、上に何かの気配を感じた。

目を向けたときには遅かった。彼が目にしたのは、右手に持った酒瓶を自分に向けて降り下ろす中年の姿だった。瓶はレイダーの頭に直撃し、粉々になり中身のアルコールとガラス片を辺りにぶちまけた。レイダーはその場に倒れ込み、その拍子に手からコンバットショットガンが滑り落ちた。

「てめえら酒が飲みてえんなら浴びるほど飲みてえよなあ…どうだ頭から浴びた気分は、ええ？ ヒック！？」

そう言いながらも片方の酒をラッパ飲みする酔っ払いのオッサン…もといコリン・モリアーティ。

「……こ、この酔っ払いがぁー！！！」

やっと意識がハッキリしたのか、もう一人が起き上がりモリアーティ目掛けて金属パイプを振るう。それが当たる前にモリアーティは懐からライターを取りだし火をつけ、口に含んでいた酒を吹き付けた。

「ぐあああつ!?!」

ライターの火に引火したアルコールが業火となってレイダーに襲い掛かり、一時的に視界を潰す。すかさず顔面に鉄拳を見舞って沈める。

「へっ!　ざまあみやがれ!」

「ギャツ!」「グワァ!」

右側から近づこうとした二人は弾幕で近づけずにいるところを死角から狙ったルーカスのハンティングライフルと元レイダーのジェリコ愛用のスナイパーライフルの前に倒されていた。まだ息はあるようだが戦闘続行は不可能だろう。

「よし、これで――」

「きゃあつ!?!」

「!?!」

片付いたな、と言おうとした瞬間マギーの悲鳴が聞こえた。悲鳴の

した方をみるとマギーを人質に取って銃をこちらに向けているポッポの姿があった。

第11話 メガトン救出作戦その5（前書き）

出来ましたので投稿です。

第11話 メガトン救出作戦その5

迂闊だった。まだ頭目がいたのを失念していた自分に憤りを感じていたルーカスは、判断に悩んでいた。相手は一人だがその腕には人質にされたマギーが抱えられ、もう片方の手には中国軍ピストルが握られている。その銃口は自分達に向けられているが、下手をすればマギーに危害が及ぶ可能性がある。

「……よくもヒトの計画をメチャクチャにしてくれましたね。この代償は高くつきますよ。」

こちらが動けないのを確信したのか、強気な感じで話してくるポツ。

「今まで利益を減らしたくない一心で仏心を出してきましたがもう限界寸前です！！ 次下手な真似したらマギーを殺します！ 本気ですからね！」

そう言って武器を捨てるよう要求してくる。仕方なく皆に従うよう促して、自身もハンティングライフルを地面に投げ棄てた。

「よし、素直に言うことを聞けば許してあげないこともありません。向こうに行きなさい！」

ポップは住人達を武器から遠ざけようとする。一見強気に出ているポップだったが内心ではひどく焦っていた。今メガトン内部に残っているのは自分だけ。このままいけば敗北は必至だろう。

外に出たキヤス達が戻ってくれば勝機はあると考え、相手に有無を言わさない為に必死な思いで キレる寸前を演じていた。

武器から離れたのを確認して、だめ押しに起爆用ツールを見せつけようとして腰辺りをまさぐったとき異変に気づいた。

ない…… ない…… ツールがない！？

思わず冷や汗が流れる。 今まで肌身離さず持ち歩いていた筈なのにそれがないのだ。

「お探しの物はこれかな？」

先程の演技も忘れ、慌てて全身を隈無く探していると声が聞こえたのでそちらを振り向くが、そこには誰もいない。いや、正確にはいるのだが見えなかったのだ。 進む電流とバチバチという音とともに誰もいなかった場所にはコンバットアーマーとコンバットヘルメット（以下コンバット装備）を着た一人の青年——ユウが現れていた。 その手には自分が探していたツールが握られている。

「な、何者だ貴様……！？ いや、いやそれより何故それを持っている！？」

「あー、マギーに頼まれた助っ人ってところかな？　これはさっきあんたから盗ったのさ。」

その言葉を聞いて理解する。あの時だ、手下に指示を出した後の突然の衝撃…あれはこいつがぶつかってきた衝撃だったのか。

「さて、残るはあんた一人、頼みのツールはこちらの手の内だけどうする？　まだやるかい？」

「当たり前のことを聞きますねえ。人質が見えないんですか、それにまだ一人じゃありません。外に出た連中が戻ってくればまたこちらが優位です。」

気がつくやうに夜が明け始めていた。いつのまにか時刻は早朝に差し掛かっていたやうだ。しかしそんなことはお構いなしにメガトンで現在進行形で起きている騒動は終わりの気配を見せない。

どちらも一歩も引かない状況に長い膠着状態が続く…かと思われたが、メガトン入口の門が音を立てて開き始めたのを見て膠着は崩れた。

「ふつつ、漸く戻ってきましたか。」

部下が戻ってきたと思い安堵の表情をするポツポだが、彼の思いとは違い、そこに立っていたのは二体のロボットと101とロゴが書かれたジャンプスーツを着た一人の壮年の男性だった。

「残念だけどいつまで待っても君の仲間が戻ってはこないよ。」

「ど、どういことだ!？」

「君の仲間達は不利を悟ってメガトンまで後退したんだ。僕は後を追ったんだけど着いてみたら門の前にこのロボット達がいてね、どうやらメガトンに逃げ込めなかったみたいだよ。彼らはスプリングベールの方向に逃げていったよ。」

バカな、ロボットの機能は事前に停止しておいた筈だ。自分でやったのだから間違いない。

「あ、オフラインになってたみたいだから私がスイッチ入れたの。」

「

ジェームスの話とマギーの言葉を聞いてポツポは頭が真っ白になった。つまり自分は仲間に見捨てられ孤立無援となったのだ。

「…き、貴様らは何者なんだ!？ あんな大勢力が近くにいたなんて今日まで聞いたことがないぞ!？」

もはやポッポには何が何だか分からなかった。事前に行っていた周辺調査ではこんな勢力は確認されておらず、脅威になる存在などなかった。それがどうだ。現実には自分以外に味方はなく、完全に“詰み”の状態。勝機などもはや見出だせず、せめて自分達の敵が何者なのかを知りたかったがためにそんな言葉が口について出た。

だが、それに対しての壮年の男性——ジェームスの返答は予想だにしないものだった。

「それはそうさ。何せアレらは昨日作ったんだからね。」

「…な……に……！？」

ポッポには彼の言うことが信じられなかった。言葉の通りならあれだけのロボットをたったの一日で揃えたということだが、一体どんな魔法を使えばそんなことができるというのか。

「ヒントはこのメガトンの周りにあるものだよ。」

メガトンの周り？ 言われて直ぐに思いつくものはスクラップの山々だが…まさか！？

「気づいたようだね。僕達はスクラップの中から使えそうな物を修理して運用していたんだよ。」

「バカな！ 所詮はスクラップだ、あれだけの数を修復できるほど部品も時間もなかった筈だ！？」

そう、ポップの言う通り 僅かな時間で組み上げられる物量ではなかったし、それだけの良質な部品が大量にあったとは考えにくい。

「確かに。まともに稼働させることができたのは数えるくらいしかないかった。実を言うとな、外にいた殆どは飾りみたいなものなんだよ。」

「な、何？ 飾りだと！？」

「そうだよ。夜襲だったから分からなかったただろうけど後方に位置していたのはカメラアイの部分しかない筈だったのさ。」

その言葉に愕然とする。つまり自分達は夜の闇に明滅するカメラアイの光で相手が大军だと誤認し、浮き足立っていたわけだ。

こちらの善戦に進軍できなかったのではなく初めから進む脚がなかったということか。

まんまと騙されてしまったことに内心齒噛みして ポツポはこの後の選択肢を模索する、がいい案は浮かばずその場には沈黙が流れていた。

「仲間もこないって分かったし、いい加減降参してくれない？」

「……フフツ、降参するのはあなたの方でしょう。マギーがどうなってもいいんですか？」

ユウが降伏を勧めるがポツポは一向に諦めない。

「言うておくけど、あんたがマギーに手を出す前にオレはあんたを倒すことができるぞ。」

その台詞を聞いたポツポは鼻で笑う。見たところ武器らしい物は所持していない目の前の男が、自分を倒す？ マギーに危害が及ぶ前に？ 一体どんな思考回路をしてたらそんな事が言えるのか…。

「ハッ、そんなハツタリが通用するとても？」

「ハツタリかどうか試してみるかい？」

再び二人の間に沈黙が流れる。今度はどちらがこの沈黙を破るのか周りの者は固唾を呑んで見守る中、意外にもそれを破ったのは両者どちらでもなかった。

「いつ…ずあー！？」

突然悲鳴をあげるポツポ。皆一様に何が起きたか分からなかったが、彼の腕をみて理解した。人質にされたマギーが彼の腕に思いきり噛みついていたのだ。余りの痛さに腕の拘束が外れ、その隙をみて駆け出すマギー。

その背中に銃口がポイントされる。

銃を向けているポツポの目は怒りの余り充血し、血走っていた。今度は演技などではない、本気だ！！その場にいた全員が確信した。

ルーカスやジェリコが棄てた武器の元へ駆け出す。

ジェームスが背中に背負ったハンティングライフルに手を伸ばす。

モリアーティが盾になろうとマギーの元へ駆け出す。ユウは…武器を所持していない、丸腰だ。

——間に合わない。

誰もがそう感じた中、武器を持たない筈のユウだけは不敵な笑みを浮かべていた。

住人達の必死の行動も空しく無情にも銃声が鳴った。その場にいた全員が目を見開いていた。

——確かに自分達は間に合わなかった。

——一発の銃弾は放たれた。

しかし分らない。何故撃たれたのが“マギー”ではなく“ポツ”なのか。銃を持っていた腕を撃たれたようで、傷を押さえながら呻いている彼を余所にその視線はユウの右手に注がれていた。

何も握られてはいなかったその手にはいつの間にか一挺の10mmピストルが握られていた。銃口から硝煙が出ているのを見るに撃ったのはユウだというのは分かるのだが、いつ・どこからという疑問は解消されない。

「…何故…いつの間に、いや、武器は持っていなかった筈だ……。」

その疑問はポツポも同じだったらしく、信じられないといった面持ちでユウを見ていた。

「それについては僕が説明しよう。」

ジェームスが名乗り出る。どうやら彼だけは何が起きたのか理解しているようだ。

「君はこれを知っているかな？」

そう言ってポツポに自分の腕に付いている端末を見せた。

「それは、pip-boy:!!？」

「知っているようだね。なら『V・A・T・S』のことも知っているだろう?」

——V・A・T・S……

The vault-Tec assisted targetting Systemの略称で、高性能端末であるpip-boyを神経系に直接繋げることで、端末で得られた情報（例えば敵対した物の特徴や各部位の耐久力、攻撃した場合の命中率）をダイレクトに脳に伝達、脳内で瞬時に判断することにより思考から行動へのタイムラグを廃した画期的な戦闘システムである。

「一切のタイムラグなく脳内で瞬時に判断し行動に移せるのが『時間を止めて戦闘状況を戦略的に判断する』と比喻される所以なんだ

けど、彼のは普通のとは違うんだ。」

そこで一旦説明を区切るジェームス。何やら顎に手を当てて思案している様子だ。

「……ここからは説明に困るんだけど、どういう原理か彼のV・A・T・Sは時間に介入しているんだ。」

「時間に…介入…?」

マギーが首を傾げる、がそれも無理はない。説明しているジェームスでさえ何度見ても理解し難い代物なのだ。ここにいる殆どは話についてくることもできていないだろう。

「簡単に言つとね、自分の時間を早めて動くんだけ。V・A・T・Sが発動している間は周りの動きがゆっくりに見える。」

「……何も持つてなかったのにピストルを持つてるのは?」

マギーが胡散臭いといった顔をしながら問う。信じられない話だが、それは置いといてもう一つの疑問を口にした。

「……これも説明にこまるんだけど…彼の p i p - b o y は物質をデータ化して保管したり取り出したりできるらしいんだ。」

益々胡散臭いといった顔で此方を見るマギー。気がつけば周りの住人も皆同じような表情だ。

それを見たジェームスは思わず苦笑した。当の本人も同じように苦笑している。ポップを見ると先程の話が信じられないのだろう、理解できないといった表情で俯いていた。彼の銃はユウの一撃で離れた場所に落ちているので、もう危険性はないだろう。

朝陽がメガトンを照らす。それはまるで、解放されたメガトンを祝福しているかのようだった。

第11話 メガトン救出作戦その5（後書き）

無理くりな展開すぎたかな……。相変わらずの駄文ではありますが、暇潰しにでも見ていただければ幸いです。

第12話 メガトン救出作戦その6（前書き）

遅くなりました。メガトン編長くなってるなー。引っ張りすぎるのはよくないですね。

第12話 メガトン救出作戦その6

——負けた……。

——完璧な計画だと思ったのに……。

——どこで間違えた？

——そもそも何故こうなった？

周りを見てみると住人達は安心した様子で自分の近くにいた人間と談笑している。もう全てが終わったのだと、僕は終わった存在だと認識しているのだろう。

この上なく胸糞悪い……。

その中の一人、メガトンの助っ人に現れたと言っていた男と笑いながら話している少女を目にしたとき、ポツポの中に何かどす黒いものが広がっていくのが分かった。

——そうだ、あいつが逃げ出したからだ。

——あいつがあの連中と会わなければ。

——あいつがメガトンのことを教えなければ。

気づかれないよう踞り、撃たれていない方の腕を懐に入れる。

——あいつが……。

——あいつが…あいつが…あいつが…あいつが…あいつが…。

——あいつがっ……！！

ポッポの中に生じた黒いソレ——憎悪——は次第に大きくなり、やがて爆発した。

入れていた手を懐から引き抜く。その手には改造されて連射が可能になったハンドメイド10mmピストルが握られていた。

再び少女に銃口が向けられる。自身が狙われていることに気づいていない様子で、まだ楽しみに会話をしている。

さっきはあのあり得ない能力に邪魔をされたが、邪魔をしたその

人物は現在彼女と談笑していて気を抜いている。正に絶好のチャンスだった。引き金にかかる指先に徐々に力が込められていく。今度こそ誰にも邪魔されずにあの少女を殺すことができる。ポツポは確信した。

その顔に凶悪な笑みを浮かべ引き金を引いた後の未来を夢想しながら、ポツポは引き金にかかった指に更に力を込めた。

平和を取り戻したと思われたその場に、また銃声が響き渡った。

「……え？」

突然のことに理解が追いつかず口をついて出たのだろうその疑問符は、他の誰でもないポツポの口から発せられたものだ。

彼の銃からはまだ弾丸が放たれておらず、その銃は突然来た衝撃により自身の腕共々明後日の方向に向いている。何が起きたのかを理解できず視線を巡らせるとある人物が視界に映った。そこにはジエリコが愛用のスナイパーライフルをこちらに構えており、その銃口からは白い硝煙が立ち上っているのが見てとれた。

そこでポツポは漸く事態を把握した。何てことはない、彼が引き金を引くより先にジエリコが銃目掛けて狙撃をしマギーから射線を外させただけのことだ。

事実は物凄く単純でポツポにとってはこの上なく残酷なものだった。

形容し難い衝撃と痺れに襲われながらも、その手に握られた銃を落とすまいと何とか堪えたポツポであったが、既に状況が絶望的なのは誰が見ても明らかだった。

理解が及ばず茫然としていた表情は次の瞬間には絶望になっていた。

るだろうと誰もがそう考えた。だが、その考えは間違いだと直ぐに彼自身が証明した。

彼は――嗤っていた……。とても凶悪な笑みで。そしてあらぬ方向に向けられた銃を撃つ。既にマギーからも狙いはずれ見間違いにも程があるというのに構わず撃ち込む。連続して弾丸が吐き出され八発を数えたとき今度はそれとは別の銃声が響き、ポツポの眉間を貫いた。

ポツポの身体は糸の切れた操り人形のように、膝を着いた後不自然な体勢で仰向けに倒れた。

「……………馬鹿野郎が……」

彼を撃ったのはルーカスだった。その手には愛用のハンティングライフルが握られており、今撃ったのは自分だと公言しているかのように銃口から硝煙を出している。

レイダーの頭目を仕留めたことになるわけだが、彼の顔には苦悶の表情が浮かび呟いた言葉にもその感情が表れているのが理解できた。

如何に自分達を裏切った者とはいえ、一年間仲間として共に生きてきた人間をこの手にかけるのは……やはり苦痛だろう。他の面々もそれは同様のようで、皆沈んだ表情をしている。

その中でもルーカスはポツポと特に親しく、よく酒を飲み交わしたり談笑したりして笑いあっていた中でもあるのだ。この場にいる交流のあった人間は大なり小なり悲しみを心に抱いているだろうが、ルーカスのそれは他の人間の比ではないだろう。

ポツポの死により今度こそメガトンは解放された訳であるが、ユウは何か引つ掛かるものを感じていた。何故ポツポは最期にあんな無意味な行動に出たのだろう…。物言わぬ屍となった彼を見て考えるが納得出来る答えは一向に出る気配はない。

追い詰められて気が狂れたのだろうか。そう考えるのが自然なのかも知れないがそうとは思えなかった。彼の顔には死して尚狂気の笑みが張り付いていたが、世間一般でいう悪人の凶悪な笑みとは違う。

何というか後戻りが出来なくなり自暴自棄になった狂人が何かとんでもなく危険なことを思い付いた顔というか…。

ピーーーーー！！

突然甲高い電子音が響き渡った。それを聞いた全ての人間が一点に目を向ける。

「…………あの野郎…」

ルーカスが呻く。その顔に冷や汗が流れているように見えるのは気のせいではないだろう。

『エマージェンシー
緊急事態、
エマージェンシー
緊急事態』

「……最期にとんでもない厄ネタを遺しやがった……!!」

『端末破損、起爆シーケンスを開始します。』

けたたましい電子音を響かせて周囲の視線を釘付けにするその場所に鎮座するのはこの街のシンボルであり破滅の因子でもあるモノ。

——弾痕を刻まれて火花を散らす端末の付いた核爆弾があった。

「……ねえ、姉御……。」

「……姉御お……。」

「……何だい？」姉御と呼ばれた女性は疲労と怪我の痛みから返事をするのも億劫になつていたが、部下の一人がしつこく呼び掛けるため鬱陶しいが話を聞くことにした。

「やっぱリーダーを見捨てるのはちょっと……今からでも助けに——」

「下手な心配はよしな。それともアンタ、一人でも助けに行つてみ

るかい？」

「……へへっ……」

姉御の言葉にその部下は 特に反論するでもなく苦笑して離れていった。大方もしリーダーが生き延びた場合必ずするであろう復讐を恐れて言い出したことだろうが、あの状況で無事に生還できるとは姉御——キヤスには到底思えなかった。

中々使えるボウヤだと思ったんだけど大して役に立たなかったねえ……。

移動しながらそんな事を思う。初めて彼と会ったのはとある廃墟だった。キヤスは仲間と共に足を踏入れたのだが、出てきたとき仲間の姿はなく代わりに一人の少年が傍にいた。その少年こそ当時のポップであり、キヤスの仲間は彼の仕掛けた罠やカメラ等の監視網の前に次々と餌食になっていったのである。

その技能に目をつけリーダーにまで担ぎ上げたのだが、最期は呆気ないものだった。

あの世で見てなよ、ポップ。アンタはメガトンを手に入れようとして失敗した。アタシはそれより良いものを、vaultを必ずこの手に掴んでやる……！

胸中で野心を燃やすキャスだったが、見ていろと心の中で語りかけたその人物の行動により彼女の命もその野望も風前の灯火となりかけているのを知る由もなかった。

突如鳴り出した電子音声、それによると核爆弾を爆発させるプログラムが作動しているようだ。がその理由は実に簡単だ。最期にポツポツが放った弾丸は誰かを狙って撃ったものではなく、気が狂ってがむしゃらに撃ったものでもなかった。

彼は弾かれた腕の方向に核爆弾があるのを思い出してコンソールを撃ち抜くために引き金を引いたのだ。吸い込まれるようにコンソールに命中した弾丸は彼の期待通りに外装を穿ち内部の精密機械に甚大なダメージを与えていく。

そしてそれを異常事態と認識したシステムは事前にプログラミングされた内容に則り起爆シーケンスを開始したということだ。

その答えに至ったユウは我知らず歯噛みしてポツポツを見た。あの嗤いはこういうことだったのか、気づけなかったそして阻止できなかった自分に腹が立つがもはや後の祭りであった。

「ユウ君！」

「ジエームスさん!？」

気がつけばジェームスがこちらに駆けてきていた。何やら自身の pip-boy を弄っている。

「このままではメガトンを中心にかなりの距離が吹き飛ぶ!」

「はい…どうしましょう…!」

「危険だが…僕達の手で解除するしかない…!」

そついうと再び pip-boy を操作する。

「僕の pip-boy は改良により機械等をスキャンすることが出来る。僕が指示を出すからユウ君は作業を手伝ってくれ!」

「……わかりました!」

そして核爆弾の所に辿り着いた後、破損した端末部分を取り外し内部に身を嵌らせて滑り込ませた。端末からは幾つものコードが内部に延びており、その内の何本かが起爆信号を核爆弾に送信しているらしい。つまりはその数本さえ処理できれば起爆することはないという訳だ。

「まずは左端の青、続いて真ん中の緑！」

ハサミを構えて指示通りに切断していく。間違えて別のコードを切ってしまうとそれこそ全てが灰塵に帰してしまう。

よく見ると無数のコードの奥にデジタル式のタイマーが設置されており、恐らくは爆発までの残り時間だろうそれは今この瞬間も時を刻み続けている。ディスプレイには 04:28:36 と表示されていた。

（残り4分30秒を切った!? 時間がない!）

「うつ…ゴホツゴホツ……。」

作業を急ごうと手を動かしていると、突然吐き気や目眩がユウを襲った。一体何事かと p i p - b o y で原因を調べてみると、RADの数値が上昇していた。考えてもみれば当たり前だろう。自分は今核爆弾に上半身を嵌じ込んだ状態で、その核爆弾は起爆に向けて徐々に臨界に近づきつつあるのだ。当然放射線量も普段より増大しているのです、下手をすれば命に関わる。

（こつちもノンビリやってる暇はなさそうだな…さつさと終わらせないと……!!）

ユウとジェームスの二人が何とか解除を試みているとき、メガトン内はパニックに陥っていた。

「核が爆発するのか！？ マズイぞ、どうすりゃいいんだ！？」

「とにかく逃げようよ！？ 出来るだけ遠くに……！！？」

「今からじゃ間に合うわけがねえだろ！？」

「望みが絶たれた……！？」

若干妙なのも混じっていたが人々は例外なくパニックを起こしている。このままだと混乱は大きくなりやがて暴動に発展しかねない、そう思われた矢先――

「静まれ……！！！」

そのたった一言にパニックになった人々は思わず動きを止める。

「ル……ルークスさん……。」

一喝した声の主はルーカスだった。

「落ち着け！ 確かにマズい事態だ、そして恐らく今から逃げても間に合わんだろう。」

改めて自分達の纏め役の口からそう宣告され、住人達は鎮まりこしたがその絶望の度合いは更に深まっていた。しかし、残酷な事実を口にしたルーカスの顔には諦めや絶望の念は感じられない。その代わり何かを必死で堪えているのは十分過ぎるほどに感じられた。

「今マギーが連れてきた二人が命懸けで爆弾の解除をやってくれてる。」

混乱してそのことに気づいていなかった住人がハツとする。

「今は…あいつらを信じるほかないんだ…!!」

下ろされた拳がギュツと握られ震えている。何もできない自分に憤りを感じているのだろう。

それを見た住人達はもう騒ぐことはなかった。

ユウはジェームスの指示したコードを順調に切断していた。

「よし、切断しました!」

「了解だ。残りはあと一本…だがこれは少々厄介だぞ。」

「厄介…?」

「他のコードより更に奥にあるんだ、切れるかい?」

言われてやってみたが後少しの所で届かない。そうこうしている間もタイムリミットは近づいてくる。

「…ぐっ…ぬっうう…!?!」

精一杯腕を伸ばしてみるがやはりあと少しの所で届かない。ディスプレイを見遣ると残り時間は後一分を切り、もはや予断を許さない状況だ。

RAD数値もとうに800を越えている。目眩どころか意識まで朦朧としてくる始末。このままだとタイムリミットが先か、放射能による死が先か…色んな意味でヤバイ。

残り時間が十秒を切る。

九秒、八秒、七秒—— 住人達は手を組んで神に祈る。

六秒、五秒、四秒―― ジェームスが固唾を飲んで見守る。
三秒、二秒、一秒―― 突如ユウの手が淡い光に包まれる。そして――

カチッ

瞬間、全ての時が止まった。ディスプレイの表示は00:00:37で停止し明滅していた。

スキャンしていたジェームスのpip-boyには、『完了（complete）』という文字が出ており、ジェームスは胸を撫で下ろす。爆弾内部で解除作業をしていたユウの手にはいつの間にかハサミではなくコンバットナイフが握られていて、その切っ先が最後のコードを切断していた。

他のコードも切るか切らないかの僅かな空間を通していることから、危険な賭けだったと言わざるをえないだろう。

「……………いやったあ……………」

見事解除できたことを認識したユウは、安堵の表情で朦朧としていた意識を手放した。

第12話 メガトン救出作戦その6（後書き）

懐から出したいがためにオリ武器を出してみる。SMGだとちよいデカイ気がする。でも何かあんまり意味もない気がする…。

書いてて思ったけど主人公死にかけてばかりだなー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5896t/>

気ままに！ ウェイストランド放浪記

2011年12月8日22時03分発行